



編物復元—その5—

富山県埋蔵文化財センター

小竹貝塚の編物復元 まとめ

MAIBUN 小竹貝塚プロジェクト Vol.7~10 でヒノキの編物復元をしてきました。復元作業では失敗もたくさんありましたが、新たにわかったことや発見もありましたのでまとめてみたいと思います。

素材の採取時期は、仕上がりを大きく左右する

編物の素材となるのはヒノキの枝です。樹木は季節に応じて成長し変化します。木のどの部位を使うのか、その目的部位によって最適な伐採時期が変わってきます。例えば建築部材として太い幹が必要な場合は、木質が締まる晩秋になります。今回は編材となる樹皮が必要ですので、春の採取となります。樹皮は特に木の成長サイクルの中で、厚さや艶、しなやかさ、強靭さが変化しています。最適な時期に植物を採取することは、製品の質や仕上がりの美しさを左右するのです。



ヒノキの植樹林

春採取の枝



春から初夏の樹木は内樹皮と芯の間にある導管を発達させて、根から吸い上げた水を末端の枝へ行き渡らせています。この導管を境として内樹皮を簡単に剥がすことができるので、きれいな横材が得られます。剥がした内樹皮には艶と厚みがあり、しなやかで丈夫です。

秋採取の枝



秋の枝の内樹皮はとても薄く、芯にぴったりとくっついてなかなか剥がれません。内樹皮を剥がすには、強く叩いて芯ごとつぶすしかありません。横材となる内樹皮、縦材となる芯、どちらもボロボロになってしまいます。

縄文人の高い技術—条材加工—

編み目が整然と並ぶ美しい編物を作るためには、編材の質と太さが揃っていなければなりません。また横材にはある程度の長さが必要です。復元してわかったことですが、小竹貝塚出土編物の条材は、縦材も横材もこれ以上細くするとちぎれてしまうギリギリの細さでした。



樹皮を剥いだヒノキの芯と磨製石斧

今回の復元作業で最も多くの時間をかけたのが条材製作の工程でした。実際には枝切りハサミ、ノコギリ、ナタ、鉄ヤスリ、小刀を使ってしまいましたが、鉄のない縄文時代に堅いヒノキをこれだけ細く均等に揃えるのは大変な作業だったことでしょう。小竹貝塚以外にも全国各地の縄文時代の遺跡から高度な編組技術で製作された細密な編物が多く出土していますが、そこには編む技術だけではなく、植物の知識と優れた加工技術があることがわかりました。

縦材はなぜ2本1組なのか

全国から出土したもじり編みの編物の中で、小竹貝塚出土品のように縦材を2本1組とするのは珍しい事例です。縦材はなぜ2本必要だったのでしょうか。その理由は、円形であることと、2本の縦材を分岐させ広げていくためと考えられます。3本の骨組みに縦材を次々に差し込みながら編み、縦材間が広がったところで頻繁かつ不規則的に分岐させて目を増やし細密な編み目をつくりだしているのです。

製作者は右利き

編物の中心を手前に置いて円周上部を時計回りに右手でもじり編みすると、出土品と同じ編み方になります。この場合、横材が左下から右上奥に入るので、右利きの人が作業しやすい向きとなります。しかも横材を手前側(円の中心)に向かって締めながら編む形になるので、固くしっかりとした編み目に仕上がります。

製作方法が途絶えてしまった理由は…

小竹貝塚の編物は縦材の大半が中心を通らないため、脱落しやすく脆い構造となっています。現代のザルやカゴは条材の1本1本がしっかりと縦横に組まれた構造ですので、条材が脱落しやすいという欠点はありません。こうした構造上の弱さが理由となって、製作技法が後世に残らなかったのかもしれませんが。

編物の用途は？

編物は軽いため持ち運びには便利ですが、この編物は壊れやすいので、山や海、川へ食料採集しに出掛ける時、気軽には持っていきません。一般的に編物は通水性に優れているので、木の実や山菜など植物のあく抜きや水さらしに用いられる場合が多いと言われますが、これは目が詰まっているので水さらしにも不向きです。通気性もあまりよくなさそうです。残るはヒノキが持つ抗菌・防虫効果を生かして、食べ物の天日干しに使われた可能性です。小竹貝塚の潟湖に面した立地、それから大量に出土しているヤマトシジミの貝殻や魚の骨などを考えると、魚の干物や干し貝づくりに使われたのかもしれないな…と想像しています。



骨材の間へ縦材を次々と追加していきます



中心部に縦材の追加が足りなかった場合。編み目が大きく雑な印象の編物になってしまいました。



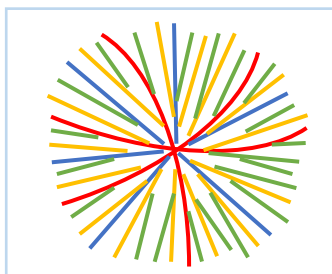
縦材を差し込んで増やし、後に分岐させます



縦材の追加と分岐によって目の細かい仕上がりにになりました



横の条材を時計回りに編み進めます(赤矢印)。編み目は自然と自分の体がある手前側に締まってきます(黄色矢印)。



左：小竹貝塚出土編物の構造模式図

赤が骨材。他は随時差し込んで増やしていった縦材。青は早い段階で追加した縦材で、黄、緑と続きます。中心で固定されているのは赤い骨材だけです。